登場人物紹介

茶倉練（攻）
茶倉スピリチュアルサービスの若き社長。関西弁霊能者。

烏丸理一（受）
茶倉の助手で霊姦体質。ゲイ。

烏丸正一
理一の祖父。京都在住。

小山内雅
正一の昔馴染み。今回の依頼者。

小山内葵
雅の孫。夢遊病に悩まされている。不登校の中学生。

地獄蝶
小山内家を祟る怪異。黒い蝶の姿で出現する。

御厨多聞
稚児の戯の参加者。御厨家嫡男の陰陽師。茶倉の昔馴染み。

蝶々炎舞

朧な視界に天井を支える太い梁と等間隔に並ぶ柱が浮かび、既視感を呼び起こす。
またこの夢だ。
小山内葵（おさないあおい）は部屋を抜け出し屋敷を徘徊していた。今いるのは日常的に寝起きしている母屋、二階建て日本家屋の一階北側。二十代続いた旧家の敷地は広く、幼い頃はよく迷子になって泣いたものだ。そういうときは必ず祖母が迎えに来てくれた。

『さがしたわよあおちゃん』
『おばあちゃん……ぐすっ』
『お父さんお母さんが心配してるわ。かくれんぼはおしまいにして帰りましょ、ね？』
『うん』
『しっかりおてて握ってね』
『おばあちゃんの手しわしわだね。しわとしわをあわせたらしあわせになれるんでしょ』
『ふふ、あおちゃんは物知りねえ』
『けどね、ジュンちゃんは違うっていうんだよ。しわとしわをあわせたらしわよせじゃんって』
『ジュンちゃんは賢い子だねえ』
『どっちが本当なの？』
『どっちも嘘じゃないわ。皺と皺が合わさる位の間一緒にいたら、いいことも悪いことも同じだけ経験するのよ』
『よくわかんない』
『そのうちわかるわよ、きっと』

繋いだ手の湿った感触を反芻し、無邪気でいられた日々を懐かしむ。あの頃は葵にも待っててくれる両親がいた。
物心付いた頃から見慣れた光景が何故に不安を誘うのか。
昼と夜とで屋敷の空気は様変わりする。
無垢の木と漆喰でできた家屋は昼こそ安穏と鄙めいているが、夜はよそよそしく取り澄まし、家人さえも拒むかのような薄ら寒さを漂わせる。

葵が育った家なのに。

ひたり、一歩踏み出す。ひたりひたり、爪先で探るように注意深く進む。
刹那、行く手を何かが過ぎった。正体を見極めるべく目を凝らす。

蝶がいた。

蝶々は一羽二羽と数えるのだと教えてくれたのは、十年来の幼馴染のジュンだった。小学校低学年の頃までは共に虫捕り網を持ち、近所の野山を駆け回った。
当時から活発な性格でよく日に焼けていたジュンは、昆虫に興味あれどもさわれない葵と正反対にクワガタ獲りの名人で、女子が怖がるカブトを平気で掴み取りしていた。

『もらっていいの？』
『兄ちゃんが捕まえてきたヤツうちにいっぱいいるもん』

あとで一羽二羽は間違いで、一頭二頭と数えるのが正しいと知った。

だが葵は今に至れど頑なに一羽二羽と呼ぶのをやめない、そちらの方が儚く美しい蝶々のイメージに合うから。

世の中には知らない方が幸せなことがきっと沢山あって、蝶々の数え方もそうなのだ。

たとえば好きな人の気持ちとか、自分がふられた理由とか。

感傷か成長痛か。膨らみかけの胸の疼きを持て余し、目と鼻の奥の痛みを瞬きでごまかす。

束の間の追憶から立ち返り、雑念が蝕む思考の焦点を蝶に絞る。

蝶の種類には詳しくないが、恐らくアゲハ蝶。

されど普通のアゲハと異なり黒い模様の面積が広く、後翅に目のような赤い斑点が入っている。祖母に訊けば名前がわかるだろうか。

黄金(こがね)にきらめく鱗粉が微粒子の如く霧散し、優雅な軌道を描く。

目を離せない—そらせない。

あえかな羽ばたきに導かれ朦朧と足を踏み出す。ひんやりした廊下には何故か墨の匂いが漂い、小学校の習字の時間を思い出す。

おもむろに立ち止まる。

道しるべにしていた黒い蝶が、襖に吸い込まれるように消えたのだ。

小山内家に蝶の襖絵の座敷はない。珍しい意匠ゆえ、見たら絶対覚えているはず。

葵はここ半年ほど、夢の中で存在しない座敷に連れて来られていた。心療内科の先生曰く、悪夢の原因はストレスだそうだ。

不可思議な夢を見始めた時期は、葵が不登校になった時期とかぶっていた。

学校に行かねばならないプレッシャーと行けない後ろめたさが悪夢に化けるなら、蝶は何の隠喩なのか。

他にも腑に落ちないことはある。夢を見る都度、襖の隙間が広がっていくのだ。
最初はぴったり閉じていた。それが指一本分、二本分と徐々に開いていき、半年経った現在は指三本幅の隙間を生じていた。
合わせ目の奥は深沈と闇を湛え、何かが集い蠢く気配に乗じ、射るような視線が届く。
固唾を飲んで凝視を注ぐ先、襖に同化した蝶の前翅がかすかに震えた。

『此処よ』

艶っぽく掠れた声音が響く。
絵が喋ったと早合点し手を伸べた瞬間を見計らい、合わせ目から湧き出でた霧が身を包む。
息できない。苦しい。
夥しく重なる黒い翅が帳を落とし、夜よりなお昏い闇が混乱を招く。濃密に立ち昇る鱗粉に噎せ、羽ばたきの圧に怯む。
突如として雪崩れ込んだ蝶に取り巻かれ、廻る。
不安定に前のめり、縺れる足でたたらを踏み、行ったり来たり翻弄されながら手を振り回す。
払っても払ってもきりがない、後から後から堰を切り溢れ出す。
あがけど報われぬ狂おしい焦燥と、息の通り道を塞がれる絶望が募っていく。
極薄の翅が瞼に鼻に頬に唇に当たる、短く切った髪を掠めて飛んで行く。
睫毛に塗された鱗粉が光り、円い瞼を色付かせる。唇がざりっとした。翅が口に入り、慌てて吐き捨てる。
垢抜けない生娘に仕出しの化粧を施すが如く、贅沢に撒かれた鱗粉が葵を作り変えていく。
芯から慄きやめてと叫ぶ。生理的嫌悪が膨れ上がり、滅茶苦茶に暴れ狂い、鬱陶しい蝶の群れを拒絶する。
『此方にいらっしゃい』
漆黒の帳の向こうでくれないの唇が綻び、襦袢をしどけなく着崩す女が微笑んだ。

拝啓　烏丸正一様

夏空が眩しく感じられる頃となりました。久しくお目にかかる機会がございませんがご清祥にお過ごしでしょうか、小山内雅（おさないみやび）です。

こうしてお手紙するのは何年ぶりでしょうか、楽しかった高校時代を思い出します。正一さんは主将として男子校の剣道部を率いてらっしゃいましたね。泉高の大会荒らしと呼ばれ、全国の強豪に恐れられた逸話は忘れられません。今も目を瞑ると道場で竹刀を振るい、果敢に面を取りに行くお姿が甦ります。太い気合の声や飛び散る汗の輝きさえも。

万事において曲がったことが大嫌いで筋を通すのを重んじた正一さんは、その凛々しく精悍な風貌と硬派な立ち居振る舞いでもって、私を含めた女学生の憧れの的でした。綾女さんと誘い合い、毎日のように練習を覗きに行ったのは若気の至りです。当時下宿させていただいた左京の叔母も鬼籍の人となりました。

前回お会いしたのは綾女（あやめ）さんのお葬式でしたね。その節はゆっくりご挨拶もできず申し訳ございません。肝臓がんとお聞きしましたが、あんないい人が亡くなるなんて本当に残念です。嘗ての親友として、いいえ、一人の人として早逝を悼みます。

器量よしで心根が優しい彼女と貴方はよくお似合いでした。はっきり覚えていますよ、坊主頭の正一さんとおさげ髪にセーラー服の綾女さんが共に帰る姿を。時折目を見交わし頬を染める初々しい風情を。

初恋を成就させた綾女さんは幸せ者です。

現在、私は中学二年の孫と二人暮らしです。婿養子の夫は十五年前に世を去りました。

孫の名は葵といいます。しっかりした女の子です。初孫なので目に入れても痛くありません。

身内の恥を明かすようで心苦しいですが……息子と嫁は結婚当初から折り合いが悪く夫婦仲が冷えきっており、葵が小学校に上がる頃離婚が決まりました。

それ自体は差し出口を挟むことではありません、当人同士よく話し合って決めたのでしょうから。

許せないのはそれぞれ不倫相手と暮らしたいと言い出したことです。

息子の相手はひと回りも離れた職場の後輩、嫁の相手は大学の同期の男友達。これから好きな人と築く新しい家庭に連れ子の居場所はありません。

案の定息子夫婦は葵を持て余し、この家に預けにきました。捨てたも同然の所業です、我が子ながら情けない。

どこで育て方を間違えたのか……古臭い家を厭い、飛び出すのを止めずにいたのが原因でしょうか。私とて若い時分はしがらみの多い実家を嫌っておりました。

そんな不憫な境遇も相俟って、ただ一人の孫が可哀想で可愛くてなりません。

ろくに会いに来ない息子と嫁などこの際どうなっても構いませんが、この子にだけは幸せになってほしい。

葵は私の全て、生き甲斐です。

私は孫に不自由させまいと誓い、身勝手な二親の分まで愛情込めて可愛がりました。世間に出た時に恥ずかしい思いをせぬようひと通りの礼儀作法は言うに及ばず、嫁入り修行の一環としてお茶やお花の稽古、ならびに家事の仕方を学ばせました。

幸い葵はよく懐き、とてもいい子に育ちました。祖母想いの自慢の孫です。

もとより小山内家は藩主の縁戚にあたる地元有数の旧家、葵が成人するまで余裕をもって養える蓄えをご先祖様が遺してくれました。私は和裁の資格を持ち、お茶とお花を嗜んでおりまして、我が家で営む着付け教室の収入も心強いです。別々に家庭を持った息子夫婦がよこす養育費には一切手を付けず、葵名義の口座に貯金しています。

きたる成人の日に向け、あの子に振袖を仕立ててあげるのが今の私の夢です。

先日、葵を連れて馴染みの呉服屋さんに伺いました。気が早いと笑わないでください。私も古希を跨ぎましたし、七年後にどうなってるかわかりません。近頃変な咳が出るようになったのを顧み、準備は早い方が良いと思ったのです。

葵は照れも手伝い気乗りしない様子でしたが、最後には「これがいい」と青い反物を指さしました。昔から男の子っぽい色を好むのです。名前とお揃いにしたいのかもしれません。

祖母の欲目ながら可愛い顔立ちをしておりますし、赤や桃色など華やかな色柄もきっと似合うでしょうに。本人の趣味嗜好なので仕方ありませんが、もうすこしお洒落に気遣ってほしいのが本音です。男の子のまねばかりしたがるとんだお転婆なんです。小さい頃は仲良しのお友達と野山を駆け回り遊んでおりました。

やんちゃぶりでは正一さんのお孫さんといい勝負ですね。

そうそう、理一くんはお元気ですか？　綾女さんのお葬式で見かけたきり……お坊さんの目を盗んで木魚を叩いて叱られたこと、葬式まんじゅうを盗み食いし喉に詰まらせたこと、微笑ましく思い返します。お経の途中で居眠りしちゃったのは仕方ありませんね、小さい子には退屈ですもの。

正一さんによく似た凛々しい顔立ち……てっきり道場を継ぐとばかり思っていたので、霊能者の助手になられたのは意外でした。元同級生だとお聞きしましたが、卒業後も付き合いが続いてるなんてさぞかし仲がよろしいのでしょうね。

理一くんの噂は滋賀にも届いております。正しくは理一くんが師事する方のお噂が。

プロ霊能者の茶倉練さん……テレビや雑誌で日々ご活躍を拝見しています。孫が見ている動画共有サイトにもチャンネルをお持ちとかで、楽しく視聴させていただきました。

眉がきりっとした、男前な理一くんとはまた異なる綺麗な顔立ちですね。若い頃追っかけていた女形の歌舞伎役者に少し似ています。

今回お手紙した用件は他でもありません、正一さんに大事なお願いがあるのです。

それというのも先述した孫の身の上に、奇妙な出来事が相次いでいるのです。

葵は現在中学二年。ですが学校には行ってません。いわゆる不登校です。

原因はよくわかりません。

なにぶん思春期の難しい年頃ですから、先生やお友達と揉めたとか校則が気に入らないとか、些細なきっかけで足が遠のいてしまうのは否めません。

正一さん、覚えてらっしゃいますか？　私が通った女子高には肩をこす髪は結わねばならぬきまりがあり、乙女心に随分反発したものです。綾女さんのおさげ髪は似合ってましたけど……比べるのも厚かましいですわね。小町娘のうなじに見とれた殿方は数知れず、貴方もそのクチでしょうか。

祖母の目から見た葵はとてもしっかりしたいい子です。

塾など行かずとも成績は常に上位。運動神経にも恵まれ、何ら問題ない学校生活を送っているように見えました。

半年前までは。

ある日を境に葵はぱったり中学に行かなくなりました。

もちろん事情を聞きました。何か嫌なことがあるなら言ってほしい、おばあちゃんが学校に掛け合うからと説得し……だけど固く口を噤み、「ごめんなさい」と繰り返すばかり。

それ以上追い詰めるのを恐れ、時が自然に解決してくれるのを待ちました。

不登校は一時的なものに過ぎず、いずれ復帰できるに違いないと祈り。

その判断が間違いだったのでしょうか。

学校へ行けなくなったのと前後して、葵に変化が起きました。夜な夜な部屋を抜け出し、忘我状態で屋敷をさまよい歩くのです。

夢遊病です。

憚りながら異常に気付いたのは先週……年のせいか眠りが深く、一度寝付けば余程の事がないかぎり起きない体質ときて、深夜徘徊を察するのが遅れました。
ふだん葵は二階で、私は一階の和室で寝ております。
先週の月曜、凄まじい悲鳴に叩き起こされました。
血相変えて駆け付けた私が見たのは、狂ったように顔を叩いて暴れる孫の姿でした。
「早くとって！」
言ってる事がまるでわからず、おそるおそる尋ねました。
「一体何のこと？」
「私の顔にたくさんくっ付いてるちょうちょだよ、あっちこっち飛んでるじゃん、見えないの!?」
葵は顔面に蝶が張り付いてると言って譲らず、しかし私にはそんなもの見えません。
常軌を逸した場面を目の当たりにし、孫の気が触れてしまったのではと危ぶみました。
それから葵は叫んで暴れ、羽交い絞めで制す私を振りほどいて顔をかきむしり、だしぬけに気を失いました。
翌朝にはけろりと目覚め、昨日の事を覚えているかと聞けば、「あのね、変な夢を見たの」と決まり悪げに打ち明けるではありませんか。
その夢の内容がまた不可解と申しますか、そこはかとなく不気味なのです。

夢の中の葵は屋敷の北側を歩いております。
やがて行く手に蝶が現れ、幽明境を異にする軌跡を辿るようにして、黒い蝶が描かれた襖に突き当たります。
現実の屋敷に蝶の襖はございません。小山内家は藩主の姻戚にあたる格式高い武家。代々質実剛健を尊び奢侈を嫌うがゆえ、花鳥風月を模した華美な襖絵は存在しないのです。
葵が襖に手を掛けたのを見計らい、隙間から蝶の大群が飛び立ちました。蝶の群れは葵を包み、好き放題に翻弄します。
襖の合わせ目の向こうには一人の女が座し、妖しく微笑んでいたと言います。

私が指摘するまで夢遊病の自覚症状はございませんでした。夜な夜な屋敷を歩き回っていても、明け方には布団に戻っていたから気付かずいたのでしょうね。

あの子が誘われた座敷は何処なのでしょうか。

私が知らない開かずの座敷が、屋敷のどこかにあるというのでしょうか。

半年前から孫の夢見の悪さを案じ、心療内科の先生に診ていただいたものの一向に改善されず……追い討ちをかけるように夢遊病が発覚し、もはやどうすればよいかわかりません。

懸念は他にもあります。葵が見ているのがただの夢ではない疑いです。

思えば妙に勘が鋭い子でした。物心付くまえからおかしなことをしたり言ったり……何もない暗がりを指して人がいるとか、天井を見上げて佇んだりとか。

……いえ、偽ってはいけません。恥を忍んで相談するなら全て詳らかにせねば礼儀に悖ります。

葵が狂ってしまったのは、この家のせいかもしれないのです。

息子夫婦が孫を初めて連れて来た時、あの子は澄んだ瞳をぱっちり開き、居間の欄間を見詰めてただ一言「ちょうちょ」と呟きました。

欄間に彫られていたのは伝統的な唐草模様で、蝶々などどこにもいないのに。

あの時から葵にはこの世ならざるものが見えていたのかもしれません。実親が手放した理由も、あるいは。

葵に霊感が芽生えた元凶がこの家にあったら。それが離婚の真相なら、どう償えばよいのでしょうか。

孫を送り届けた息子は「コイツは母さんに懐いてるから」と弁解しました。嫁はただただ恐縮しきり、「よろしくお願いします」と頭を下げました。

両親に手を引かれた葵は意固地に唇を引き結び、いじらしく俯いて。
尖った目に一杯涙をためて。
小さい体で一生懸命踏ん張って、世の中の理不尽と戦っておりました。

あの時心に誓ったのです。
このさき何があろうとこの子の味方でいようと、小山内の当主として……祖母として最愛の孫を守り抜こうと。

世間には予知夢や虫の報せと呼ばれるものがございます。ギリシャ神話に登場する蝶の化身プシュケは魂の運び手……ならば黒い蝶は不吉の兆しでしょうか。
このさき葵に何かあればとても生きて参れません、息子と疎遠になった今ではただ一人の身内を失うのが怖いのです。孫の成人を見届けるのだけが老後の楽しみなのです。

心配症とあきれましたか。
過保護とお笑いになるでしょうか。
膝枕でうたた寝する理一くんの頭をなで、「うちの宝や」とはにかんだ正一さんになら、必ずおわかりいただけると信じてやみません。

お願いします正一さん。
理一くん茶倉さんに、当家にお越しいただけませんか。
ぜひとも葵に会って、詳しい話を聞いてほしいのです。
この頃の葵はとみに無口になり、私との会話さえ避けている節があります。

夜毎見る夢のせいか不登校の契機となった出来事のせいか推し量れねど、あの子が心配なんです。
茶倉さんは確かな実力をお持ちの一流霊能者だと伺いました。長野の集落では祟り神と戦い封じ、岩手の寒村では神隠しに遭った子供を取り返したと記事に書いてありました。
その評判に嘘偽りなくば葵を悩ます霊障も必ずや解決してくれるはず。
無理なお願いなのは百も承知です。そこを何卒、旧友の誼で取り持ってくださいませんか。もちろんお礼はお支払いします。
ご返事お待ち申し上げております。

「ハッ！」
籠手を嵌めた手で竹刀を握り、中段の構えから跳ね上げるように振り抜く。
「ハアッ！」
今日は調子がいい。剣筋が冴えている。
気息を正して大胆に踏み込み、面・胴・小手・突きの順に切れがよい技を繰り出す。

『殺気は漏らしたらあかん、溜めるんや。振り撒いたかて敵の警戒誘うだけでええことない、明鏡止水を信条にせい』

瞼の裏に浮かぶのは大昔の光景、神棚を背に剣道の心得を説く爺ちゃんの姿を思い出す。正座で聞いてたせいで終わる頃にゃ膝が痺れたっけ。
爺ちゃんの道場で学んだ教えを守り、ひたすら剣を振るううちに心が澄んでくる。

中段。上段。下段。
霞の構え。平青眼の構え。八相の構え。
仕掛け業に応じ業、抜き・返し・摺り上げを流れるようにこなす。

剣道歴はブランク挟んで十五年以上、部を辞めてからも毎朝自主練していた。物心付いてからやってたせいでサボると落ち着かねえのだ。
余談だが親父も元剣道部でよく練習相手になってくれた。姉貴にゃ「朝っぱらかうるさい、元気玉でもぶっぱすんの!?」と怒鳴られたもんだ。
「ていっ！」
竹刀の先端を素早く回し、相手の突きを巻き込んで返す。イメージトレーニング。

爺ちゃん曰く、俺の剣筋は真っ直ぐすぎるんだそうだ。時には小手先の技で翻弄するのも必要。
「面！」
一際深く踏み込んで竹刀を打ち下ろす。
幻影の急所を突いた。勝負あり。
「ふー」
暑苦しく蒸す防具と籠手を脱ぎ深呼吸。
汗びっしょりの顔を手で扇いでぼやいた矢先、おもむろに影がさす。
「隙あり」
体が勝手に動く。
右手の竹刀で突如として降って沸いたタオルを薙ぎ払い、跳躍の勢いに任せて着地。
床に舞い落ちたハンドタオルを一瞥、不意打ちを仕掛けた刺客に怒鳴る。
「何すんだ！」
「貸したろ思たんに」
「余計なお世話、マイタオル持参してるよ」
「雑巾ちゃうの？」
「失礼な」
でもまあ、せっかくなんで借りとく。床に落ちたタオルを拾い、首に巻いて汗を拭く。
途端に吸水性ばっちりの柔らか生地とフローラルな洗剤の香りに包まれ、気持ちよさにうっとりする。
「ファーファに生まれ変わったみてえ。柔軟剤使ってる？」
「高いヤツな」
「どうりで」
「庶民に違いがわかってたまるか」

相変わらず口が悪い。
毒舌に興ざめし、ぬるまったスポーツドリンクを嚥下する。俺の視線の先じゃ道着に身を包んだ茶倉が弓に矢を番えていた。
ここは茶倉のセフレの一人である、バツイチ美人社長が経営している会員制スポーツジム。都内某所に存在し、従来のフィットネスの他に弓道や剣道の稽古も行えるのが最大のウリだ。
滑り止めを施した床と地続きに道場と矢場が備わり、芝生を刈りこんだ屋外に的が並んでいる。
グーグルマップで検索したところ剣道弓道の練習ができるジムは相当レアっぽく、学生の姿がちらほら見受けられた。青春してるな若人よ。
「にしても……」
「言いたいことあんならハッキリ言え」
「道着姿新鮮だな〜って」
今日は上司の付き合いでジム兼道場にきた。道着姿を見るのは初かもしんねえ。
白い道着に黒い袴を合わせ、きりっと帯を締めた茶倉は、端正な立ち姿と相俟って凛々しさに磨きがかかっていた。
「ファンに隠し撮り売って小遣い稼ぎするか」
「ただでさえ顔うるさいんやから後半は腹ん中にとどめとけ」
「おい待て誰の顔がうるせえって⁉」
「お前や口デカ」
弦を弾きながらあきれる茶倉。気を取り直し矢場に立ち、的に対して踏み構え―
解き放たれた矢が長大な弧を描いて飛び、的の中心の図星を射抜く。
思わず口笛を吹く。
「やるじゃん」

おまけで拍手。茶倉は憎たらしげに鼻で笑い、続けざまに狙い定める。
次から次へ放たれた矢が図星に刺さり、ギャラリーが湧く。ほぼ全部真ん中を射抜いていた。
「絶好調」
振り返りざま不敵に笑み、俺が巻いたタオルをひったくる。それに顔を埋める間際、露骨な顰め面でこういった。
「くっさ。やっぱいらん」
「〜〜かっわいくねえ」
地団駄踏んで憤慨する俺を無視、どこ吹く風と取り澄まし稽古に戻る。
茶倉練は俺の元同級生で上司にあたる。コイツは拝み屋の孫にして一流の霊能者、口は悪いが腕はいい。
普段はタワマンのオフィスにふんぞり返り依頼人を待ってるが、今日は特別に休みをとり、知り合いのジムで爽やかな汗を流していた。
「修行の成果あったな。一週間山籠もりしてたんだろ、どうだった、精進料理でたか」
「食いもんにしか興味あらへんのかい」
「滝行した？　火渡りした？　クマいた？」
「もっとおっかないもんがおった」
修行から帰還した茶倉は前にも増してバリバリ仕事をこなし、依頼人に恩を売り、メディアの取材を受けまくっていた。精力的な活動の裏で人妻コマすのも忘れねえあたり、各段にパワーアップしてると見ていい。
「減るもんじゃなし土産話聞かせてくれよ、こちとら一週間寝込んでたのに」
さりげなくを装い、続ける。
「玄とその……色々あったんだろ」
オフィスで電話を盗み聞きしてから茶倉の昔馴染みが気になってたまらない。
「随分仲良さげだったじゃん。今度東京来んの？　ガイド頼まれてたよな」
ずけずけ聞きすぎかもと思ったものの、好奇心を禁じ得ずぐいぐい行く。案の定茶倉は気分を害す。

「修行の仔細なんぞ思い出しとうない、山登りは当分願い下げや」

しらばっくれんのが怪しい。背中に爪痕付けるってどんな関係さ？

聞きたいのに聞けねえジレンマに苦しみ、もどかしげに横顔を見詰める。てか俺以外にいたのかよダチ。

「馴染みに会いに行くなら教えろ水くせえ」

「玄の話は三時間たっぷりしたろ、これ以上何知りたいねん」

「全然足りねえよ、年齢家族構成血液型誕生日足のサイズ好きな食べ物嫌いな食べ物エロ本の趣味、ＢＳＳこじらせたムッツリ野郎ってことっきゃわかんねー」

「びーえ……何やて？」

「僕の方が先に好きだったのに略してＢＳＳ」

「あー……」

茶倉曰く、玄は十五年前に稚児の戯とやらに参加しそこで出会った子に一目惚れしちまったそうだ。

面倒くさげにあしらい続ける茶倉にちょこまか付き纏い、消化不良な疑問点を蒸し返す。

「初恋の子の行方は？」

「都会でがっぽり稼いどる」

「仲良くなったきっかけは？　やっぱむこうから？　稚児の戯のライバル同士って話だけど、メンチ切った途端ビビッと来たの？　ノンケ？　男前？　写真ねえの」

「撮り忘れた」

「年は二十八って言ったよな、アラサーのおっさんか」

「二歳しか違わん俺らもダメージくらうやん」

「戦闘スタイルは棒術。錫杖振り回してぶちのめすとか罰当たりっぽい」

「僧兵の基本」
「寺生まれのGさんの必殺技」
「エンジンフルスロットルで雑木林爆走。曲乗りも上手い」
「ハーレー二ケツって結構な特攻野郎じゃねえか」
「ジブンの席のうて残念やな、サイドカー付けるか」
底意地悪く茶化され、顔真っ赤で反論する。
「全然うらやましかねーし！　大型二輪で事故ったら死ぬし!!」
ここ暫く茶倉は不調が続いていた。封印の力が弱まり、きゅうせん様の抑えが利かなくなってきたのだ。
祟り神の暴走を許せば日水村の惨劇が再び起こりかねない。
東北に行った目的はいらたか念珠を手に入れることプラス修行。
そこまではわかる、納得してる。
一週間に亘る修行を終え東京に帰ってきた茶倉は何か吹っ切れたように見えた。
前と比べてしゃんとしたっていうか、体の真ん中に芯が通った気がする。
山寺で鍛え直された？　それか例の倅と……悶々と邪推を働かせ、オツムからぷすぷす煙を噴く。
茶倉のスランプ克服が山寺の倅のおかげだったら、自称相棒の存在意義ってなんだ？

「ほらよ」
堂々巡りにむしゃくしゃし、首からとったハンドタオルを投げる。
茶倉は即座に反応した。眼光鋭く弓を絞り、宙に舞ったタオルに矢を打ち込む。
固定された的と違い、動いてる的を射抜くのは滅茶苦茶難しい。それを造作もなくやり遂げた。
矢に貫かれたタオルが床に落ちると同時、道場全体にヒステリックな声が響き渡る。
「そこっ規約違反！」
「げっ操さん」
まっしぐらに走ってきたのはアラフォーの知的な美女。スレンダーなパンツスーツに身を包み、いかにもデキる女って感じを漂わせている。ちょうど耳元にかかる位のショートヘアがよく似合っていた。
「矢場じゃ的以外狙わないこと。ルール守んないなら金輪際出禁よ」
「すいません、肝に銘じます」
「僕からも注意しとくんで許したってください」
彼女は倉橋操（くらはしみさお）、茶倉のセフレでジムの経営者。他にも手広くやってるらしい。
「万一誰かに当たったらどうすんの裁判沙汰よ」
「そこは大丈夫っす、人いないのちゃんと確めたんで。最悪壁がへこむだけ」
「黙っとれ」
「うす」
全面的に俺が悪いと反省、平謝り。
操さんはまだぷりぷりしていた。昂然と腕を組み、殊勝にうなだれる俺と猫をかぶった茶倉を見比べる。
「で、調子は？」
「上々」
「よかった」

操さんは元依頼人だ。ＴＳＳを設立して間もない頃に訪れ、引き続きお世話になってる。
一歩前に出て頭を下げる。
「会員でもねえのに使わせてくれてありがとうございます」
「練のお願いだもの。理一くんは知らない仲じゃないし」
呼び捨てかい。心ん中で突っ込む俺をよそに、セフレ同士の砕けた会話が続く。
「近場に稽古できるとこ少ないんで助かりましたホンマ」
「だから作ったの。道着って凛々しくて素敵よね～惚れ惚れしちゃうわ、二人ともお似合いよ、姿勢がいいから見栄えする」
「はは」
「理一くんは元剣道部だっけ？」
「中学ん時だけっすけど」
「またまた～主将だったんでしょ？　全国大会行ったって聞いたわよ」
「決勝で敗れちゃいましたけどね」
頭をかいて照れる。茶倉は面白くなさそうだ。
「本番に弱いんですよコイツは」
「練も部活やればよかったのに。ずっと帰宅部って本当？」
「家の都合で」
「もったいないなあ」
茶倉の場合、拝み屋の祖母の手伝いが忙しく部活をやる暇なかったというのが正しい。やんわり話題を変える。
「見学にきたんすか？」
「そんなとこ」
「ひょっとして俺ってお邪魔……」
言わずもがなの野暮な質問。操さんが悪戯っぽく微笑み、指に挟んだ封筒を翳す。

「落とし物」
「あっ！」
封筒の宛名には「烏丸理一」と記されていた。茶倉が覗き込む。
「開封済みやん。誰から？」
「爺ちゃん」
「なんで持ってきたん」
「お前に見せたくて」
「俺に？」
「そ」
怪訝そうな茶倉に頷き、折り畳まれた便箋をがさがさ開く。
「出掛けにサッと読んで鞄に突っ込んだまんま忘れてた」
「用件は」
「依頼の仲立ち。古い知り合いが孫の霊障で悩んでるらしい」
「イマドキ手紙てアナクロやな、メールでよこさんかい」
「長文は苦手なんだ」
便箋にゃ気骨を感じさせる達筆な字で、滋賀に住む知人の家族に起きた怪現象が綴られていた。操さんが訳知り顔で指摘する。
「なるほど……葵ちゃんて子が悪夢にうなされてるのね、気の毒に」
和紙便箋に目を通し、事の次第を概ね把握する。
「なあ茶倉」
「滋賀まで出張れて？」
「爺ちゃんの顔立てると思って」
「会うたことない」

「お代払うって言ってる」
「直接来んかい回りくどい、なんで仲介噛ますねん手数料余計にとるで」
「爺ちゃんはとらねえよ」
「いいじゃない行ってあげたら。困ってるんでしょ」
操さんがうきうきして口を挟む。俺から奪った便箋を見直し、茶倉が真面目な顔で独りごちる。
「……藩主の姻戚筋か」
どれくらい報酬ふんだくれるか値踏みする茶倉をよそに、休憩用のベンチに戻りスマホをとってくる。
「爺ちゃん？　ひさしぶり、俺だよ理一。うん元気超元気」
その場で爺ちゃんに電話する。用件はすぐ済んだ。スマホを下ろし守銭奴に向き直る。
「報酬は交通費その他もろもろ経費込み」
「貸せ」
茶倉が俺のスマホをひったくり、依頼人の本名「小山内雅」で検索をかけホームページに飛ぶ。着付け教室のブログらしい。トップ画像は純和風のでかい屋敷をバックにした、和装マダムたちの写真だ。してみると前列中央の一番お年を召した老女が小山内さんか。
茶倉が軽やかに液晶をタップ、小山内さんの着物の色柄を拡大する。
「ン十万の友禅か。金持ちそやし話だけでも聞いてみるか」
「う～ん清々しいほどクズでゲス」
「出張するの？　また会えなくなるわね」
「すぐ帰ってきますよ」
寂しがる操さんの髪をかき上げ、甘ったるく囁く。
「来週の誕生日はミシュラン星三のレストラン予約しときました。前々から行きたがってた、一流のショコラティエがいる店です」

「練……」
「アペリティフは貴女の生まれ年のリレブランで……これ以上は秘密です、お楽しみがなくなっちゃいますもんね」
「期待してる」
茶倉と操さんのいちゃいちゃをシカトし、一足先に更衣室で着替え、マイ竹刀を入れた袋を背負って出てくる。
「お邪魔だよな？」
「はよ去ね」
「らじゃ」
手の甲で追い立てられとっとと退散。よくやるぜホント。

数日後、京都駅で爺ちゃんと落ち合った。
「学生多いな」
「修学旅行とかぶっちまったかも」
「お前の爺さんは」
「ホームに来てるはず……」
「メールで場所聞け」
手庇を作り見回す。
電光掲示板が発着時刻を告げ、ビジネスマンや旅行者中心の利用者が忙しく行き交うなか、場違いな濃紺の甚平がチラ付く。
「おーい！」
バンザイした手を振って呼ぶ。雑踏に紛れた懐かしい面影が、俺を認めて破顔する。
「相変わらず地声がでかい」
「実の孫にしょっぱな暴言吐くな」
ホームに溢れる人ごみを縫ってくるのは、継ぎを当てた竹刀袋を担ぎ、片手に紙袋を下げた渋い老人。かなりの高齢にもかかわらず物腰は矍鑠とし、小柄な全身に精気が漲っている。
「お噂はかねがね。烏丸正一です、孫がお世話になっとります」
「ご丁寧にどうも、理一くんの雇用主の茶倉練です」
「くん？」
胡麻塩頭をたれる爺ちゃんにならい茶倉もお辞儀。ダチと身内を引き合わせた俺の方が緊張していた。
「手土産の八ツ橋です。お上がりください」
「ありがとうございます、いただきます」
折り目正しくさしだされた紙袋を謙虚に押し頂く茶倉に合いの手を挟む。
「爺ちゃんは道場の師範代でさ、近所のちびたちに剣道教えてんの。俺もガキん頃からさんざん鍛えられた、キレると怖えカ

ミナリジジイって評判」
「礼儀にうるさいだけや」
「お会いできて光栄です」
小山内さんちにゃ三人で行くことになった。ぶっちゃけ俺と茶倉で事足りたが、爺ちゃんは一度首を突っ込んだ事をほったらかしにしたり中途半端にすんのが大嫌いなのだ。
「せっかく頼ってくれはったんに取り次ぎだけして知らんぷりは決めこめん、小山内さんの顔も見たい」
爺ちゃんがはきはき口上を述べる。
「無茶な頼み聞いてもろてえらいおおきに、助かりました」
「依頼人とのご関係は」
「小山内さんは死んだ女房の親友でワシとも付き合いがありました。高校がね、近かったんですよ。むこうは高嶺の花のお嬢様校、こっちはむさ苦しい男子校でしたが……お互い二十年は会ってません」
「へー初めて聞いた」
俺の婆ちゃんは大昔に死んでる。顔はアルバムの写真で見ただけ、正直なとこ全然覚えてねえ。爺ちゃん曰く優しい人だったらしい。
アナウンスが出発を告げる。
昇降口を跨ぐ際、爺ちゃんの背中の袋に目が行く。
「おそろいだな」
「お前も持参したんか」
「肉体労働担当なもんで。上司は難色示したけど」
肩に掛けたストラップを引っ張り、赤べこストラップ付き竹刀袋を示しゃ、茶倉が声をひそめて愚痴る。
「長物持ち歩いたら物騒やし変に目立って恥ずかしい」
「待ち合わせの目印になるしよくね？」

少々嵩張るのがネックだが、これまでの反省を踏まえ、戦支度はしときたい。いざって時に茶倉を守れるのは俺っきゃいねーのだ。
「用心棒が丸腰じゃカッコ付かねーもん」
「さいでっか。ドアの上んとこ突っかけんなや」
「わかってるって。席どっち？　窓際？」
「空いてる方でかまへん」
わいわいやりながら新幹線の車内に移動後、俺は爺ちゃんと並んで座り、茶倉が対面シートに掛ける。
……やっぱそわそわする。
爺ちゃんと茶倉が揃ったのが妙に気恥ずかしく、喉が渇いてもねえのにキャップを外してペットボトルのお茶を飲み、忘れ物はねえかリュックの中身を再確認する。爺ちゃんが苦笑い。
「落ち着きないやっちゃ」
「だってさー」
新幹線が京都駅を出発、大津駅をめざす。車窓の景色が残像と化し流れゆく。
爺ちゃんが朗らかに口を開く。
「ご出身は関西ですか」
「そうですけど」
「にしては綺麗な標準語を使いますね」
「まあ……」
「関西弁でもええですよ。喋りやすい方で」
「お気遣い痛み入ります」
まさか緊張してる？　ぎこちない受け答えに違和感を抱き、上目遣いに表情を観察。ビンゴ。
「茶倉さんとは一度話してみたかったんですよ、孫があれこれ自慢するもんですから」

「へ？」
「ほら、前に笑えるいうて送ってきた……」
もた付きがちにスマホをいじり、メールフォルダを遡ってく。
一気に青ざめる。
爺ちゃんに宛てたメールに添付したのは俺がユーチューブにアップした動画。問題はその内容で
「よせ！」
慌てて止めに入るも遅く、最大ボリュームで動画が再生された。ハイテンションな俺の声。
『全国のチャクラーの皆さんこんちゃくらー、チャクラ王子のスピスピチャンネルのお時間がやってまいりました！　本日の企画はこちら、チャクラ王子の数珠ブラックタピオカに替えても気付かない説を検証します！』
突如として車内に流れた騒音に乗客が振り向く。驚くお姉さんいたいけなお子さま迷惑げなおじさんの顰蹙を買い、戦犯は重苦しく沈黙するっきゃない。
正面の肘掛けが握力で軋み、低い声色が怒りを孕む。
「……一族郎党にばらまいたんか」
「親父とお袋と姉貴と爺ちゃんだけ」
「だけの使い方間違うとるで」
「悪ノリの極みのドッキリ企画ってのは重々承知の上さ、でもうちでダントツうけた動画ってのは動かし難え事実だろ、再生回数七十万叩き出してトレンド入りしたしチャンネル登録者激増したし！」
「こんちゃくらって挨拶からしてダダ滑りで痛いんじゃボケが」
「バズったから自慢したかったんだごめん許せ」
「食べ物粗末にするんは感心せんな」
「そこは大丈夫、企画に用いたタピオカはスタッフ主に俺が洗えば食える精神でおいしくいただきました」
「ならええか」

「ええわけあるかい」
ネットに疎い爺ちゃんの感想に茶倉が身を乗り出し突っ込む。
チャクラ王子のスピスピチャンネルはＴＳＳ公式チャンネルであり、動画の企画制作担当は俺。だからまあ、数珠タピオカ事件に関しちゃ全責任を負わざる得ねえのだが。
「バレるまで五分二秒経過はおかしいだろ、ズッコケギネス狙ってんのか」
「朝は低血圧やねん」
「寝ぼけすぎ」
「炊飯器で炊いたタピオカ食わすで」
「見た目がグロい」
「パチンコ玉にチェンジ」
「爆弾作んの？」
「圧力鍋でもできるらしいで。試そか」
「ごめんなさい」
「歯磨き中に気付いてうがいの途中でごっくんしてもた」
殺意をこめたガンとばす茶倉にびびって謝るしかねえ。爺ちゃんは話に付いていけずぽかんとしていた。それからいきなり吹き出し、豪放磊落に呵々大笑する。
「話に聞いてたとおりおもろいなあアンタ、漫才の息ぴったりやん」
「僕の事はなんて」
茶倉が頬杖を崩し興味を示す。まずい。横目で見てくる爺ちゃんに口元に人さし指を立て合図する。
「理一の高校の同級生でイケイケバリバリの関西人霊能者て聞いたわ、各メディアに絶賛売り出し中だとか」
無難な回答にホッとする。
「口が悪うて女好きで床上手」

「そこまで言わんでいい」
「霊感商法のプロなんやろ？　外国の蚤の市で大量に仕入れたパワーストーン捌いてあぶく銭もうけとるとか」
「言いたい放題やんか」
「あ〝〜あ〝〜！」
両耳を塞いでごまかしゃ白い眼を向けられた。爺ちゃんが白い歯を見せる。
「十年来の腐れ縁やて？」
「……まあ」
「うちのもんがこぞって将来心配しとったさかい、拾ってくれはってよかったわ。フーテン気取りでスネ齧られたら困るし」
爺ちゃんもというちの家族の間じゃ茶倉は俺に働き口を世話してくれた恩人て設定になる。霊姦体質のことは言ってねえ、言えるわけがねえ。
「ささ、召し上がりなさい」
「お言葉に甘えて」
爺ちゃんが勧める八ツ橋を茶倉が摘まんで食べる。俺は不機嫌に腕を組む。窓の外には寺社仏閣が点在する京都の街並みが流れていた。
「次はゆっくり見て回りてえな」
修学旅行のリベンジはまだ諦めてねえ。茶倉が意味深な流し目を投げてよこす。爺ちゃんが八ツ橋を飲み込んで口を開く。
「出張多いんか」
「そこそこ」
ＴＳＳには全国から依頼が舞い込む。厄介な妖怪や悪霊はどこにでもいるのだ。

「霊能者に弟子入りする聞いた時はたまげたで」
「弟子じゃねーけど」
「助手かて大して変わらん」
「正一さんは幽霊信じてるんですか」
距離感を計りあぐねた茶倉の問いに、爺ちゃんは率直な言葉を返す。
「信じとるか聞かれたら断言できんけど、理一がおるっちゅーならおってもおかしゅうない」
八ツ橋を噛む。嚥下。
茶倉が怪しむ。
「うさんくさい事務所で働いとるお孫さんが心配ちゃうんですか」
「人助けしとんねんやろ。ほなええ」
「はあ……」
俺に向き直り耳打ち。
「変人やね」
「知ってる」
高一で霊姦体質に目覚めて以来、色んな悪霊どもに犯されてきた。その事を家族に打ち明けられず、当然爺ちゃんにも言えず、孤独に抱え込んだ年月を思い返す。
爺ちゃんがフッと笑い、温かい瞳でこっちを見る。
「誰に似たんか理一は頑固もんでな、気に食わんヤツを上司と仰いだりはせえへんねん。そんなコイツが長居しとる、それ即ち悪霊と切った張ったな今の仕事が性に合っとるっちゅーこっちゃ。孫が天職得たなら喜ばな」
濡れた目をせっかちに瞬き、おちゃらけた軽口を叩く。
「ボロ道場に転がり込んでもよかったんだぜ」
「アホぬかせ、ただ飯食いはいらんわ」

「んなこといって～後継ぐって言ったら喜んでたじゃん」
「お前の夢はころころ変わるしあてにならん。小二ん時は消防士、小四ん時は警官になりたがっとったやないけ」
「よく覚えてるな」
衰え知らずの記憶力に感心。年寄りは昔の事ほどよく覚えてるっていうが、爺ちゃんは図抜けてる。無言で八ツ橋を食べる茶倉を会話に巻き込む。
「爺ちゃんは俺の師匠なんだ。夏休みにゃ泊まりがけでしごいてもらった」
「それが剣道好きんなったきっかけか」
「物心付くか付かねえかの頃に竹刀持たされて、他の門下生とまじって稽古してたの。孫にも一切手加減しねーんだからまいっちまうぜ、鬼だよマジ」
「身贔屓できるほど器用なタチちゃうねん」
「だから閑古鳥鳴いてんだな」
両手を揃えて素振りする俺に、懐手をした爺ちゃんがきっぱり断言する。
「仕方ない、きょうび月賦払って道場に通いたがる物好きは希少や」
「防具は蒸して汗臭えし」
「理一くんて昔からこうなんですか」
茶倉が遠慮がちに問えば、爺ちゃんは莞爾と笑み、そりゃもー饒舌に孫の恥をさらしまくる。
「婆さんの葬式じゃご機嫌に木魚叩いとったな」
「幼稚園上がる前だろ」
「葬式まんじゅうを喉詰まらせたの覚えとるか」
「ぐっ」
「三ツ子の魂百までですね」
「腹へってたんだよ」

「高校時代の理一はどないでした？　本人曰く靴箱から恋文の洪水で毎日校舎裏に呼ばれたとか、なかなか甘酸っぱい青春送っとったみたいですが」
「嘘ですね」
「てめえ！」
勢い余って腰を浮かす。たちどころに足を踏まれた。
「いてえ！」
「そんなこったろうと思いました。もっと聞かせてください」
「好物は購買の焼きそばパンで、四限目になるとわかりやすく貧乏揺すりしてました。苦手科目は化学と数学と古文と英語、ほぼ居眠りか早弁しとりましたね」
「たるんどるなあ」
「英語の授業で指されてトンデモ語訳しはったんは忘れられません、爆笑でした」
「ショベルカーのくせにEではじまるなんて反則だろ」
「むこうじゃエクスカベーター言うらしいで、勉強になったな」
「ひっかけじゃん！　詐欺じゃん！」
「せやかてエクスカリバーはないやろ。文化祭はメイド喫茶で女装を」
茶倉と爺ちゃんが思い出話改め俺の悪口で盛り上がるのにふてくされ、八ツ橋をガツガツやけ食いする。
「ホンマ意地汚いヤツで……」
「ペヤングのかやくで野菜とった気になる……」
わけわかんねえ手順を踏んで意気投合したみてえだ。会わせるんじゃなかったと今さら後悔の念が湧く。
腹立しい会話を聞き流し、赤ちゃんの二の腕とちぎりパンの比較動画をぼーっと眺めてるうちに大津駅に着いた。
「行くで」
無限ループ中のギャラン反射動画を閉じ、茶倉と爺ちゃんに続いて下車する。

小山内家は大津駅から徒歩二十分の距離にあった。ブログの写真で見た通り純和風の武家屋敷だ。二階建ての母屋と渡り廊下で繋がれた離れを擁し、庭園にゃひょうたん型の池まであるそうな。外観こそ佐沼邸よりひと回り小さいものの立派なもんだ。

「お待ち申し上げておりました」

和風門の前にたたずむ老婦人が深々お辞儀し、俺たちを出迎える。丁寧に結った白髪に萌黄色の友禅が映えていた。ゆっくり上げた面は強張り、やや緊張しているのが窺えた。

「初めてお目にかかります、正一さんを通してお手紙さし上げた小山内雅です。遠路はるばる御足労いただき感謝に堪えません」

「ご無沙汰やな」

爺ちゃんが声をかけた途端、小山内さんの表情が雪解けに似て和む。

「お変わりないのね。会えて嬉しい」

「雅さんもお綺麗で」

「嫌ですわ、からかわないでください」

「長い間不義理してごめんなさい。身辺が落ち着いたら伺いたかったんだけど」

「気にすな、伴侶に先立たれてからこっち色々大変やったろ。こないでかい屋敷切り盛りせなあかんなんて想像絶するわ」

「小山内家の娘ですもの、そのあたりは心得ていますわ。隣の方は」

「孫の理一や」

「まあ、大きくなって」

小山内さんが目をまん丸くする。なんだか照れ臭い。

「私のこと覚えてる？　お婆さんの葬式で会ったのだけど……」

「すいません」

「ふふっそうよね、ごめんね無理言って。後ろにいるのは」
「ＴＳＳの代表取締役茶倉練です。お孫さんが霊障に悩まされてるとか」
「はい。詳しい話は中で」
その後は門をくぐり、敷地を通って玄関へ案内された。歩きながら質問する。
「小山内さんと爺ちゃんは知り合いなんですよね」
「通ってた高校が近かったの。当時の正一さんは剣道部の主将で、とってもかっこよかったのよ」
「雅さんは隣の女子高の学生やった。左京区の叔母さんちに下宿しとってな、婆さん交えてよお遊んだわ」
「出会ったきっかけは？」
前を行く雅さんが含羞にうなじを染め、華やいだ声色で述べる。
「綾女さんと下校中ね、不良に絡まれてた所に偶然通りかかって助けてくれたの。自分の倍もある殿方を巴投げよ」
「すげー、少女漫画の導入みてえ」
「アレは大外刈りや」
「間違えちゃった」
面映ゆげな咳払いで訂正する爺ちゃんをよそに、小山内さんはころころ笑い転げる。長い付き合いの友人特有の緩んだ空気が心地いい。
「人たらしと女たらしどっちかな」
殿を歩く茶倉がぼそりと呟く。
「お邪魔します」
小山内さんがお淑やかに引き戸を開け、上がり框より一段低い土間で靴を脱ぐ。玄関からまっすぐ伸びた廊下の両側には、無地の襖を嵌めこんだ和室が続いていた。
質実剛健を尊ぶ家風らしいが、なるほど殺風景な光景だ。女二人で住むには寂しすぎる気がした。
雅さんがしばらく行った所にある襖を開け、俺たちを居間に通す。

「お茶をご用意しますので少々お待ちください」
老婦人がお茶を淹れに立ったのを見計らい、座布団の上の足を崩して天井を仰ぐ。
「なんか感じるか茶倉」
「せやな」
茶倉が眉をひそめて呟く。
「暗い」
「そ？　こんなもんじゃね」
「あちこち影が凝っとる。ようないもんが溜まっとる証拠や」
「瘴気ってヤツか」
「お前が鈍すぎなんや」
あきれ果てる茶倉の横、竹刀袋を下ろした爺ちゃんが険を帯びた双眸であたりを見回す。
「爺ちゃんもわかる？」
「なんとのうな」
俺だけ仲間外れか畜生。数珠を外しゃちょっとは……
「ん？」
かすかな墨の匂いに鼻を上向け、唐草模様の欄間をくぐる小さい影を発見。
黒い蝶だ。
手紙の記述を回想し茶倉に告げる寸前襖が開き、お盆を持った小山内さんが帰ってきた。
それぞれにお茶を配り、平たい座卓を挟んで正座する。ふーふーとお茶を冷まして顔を上げりゃ、既に蝶はいなくなっていた。
小山内さんが真剣な表情で切り出す。
「茶倉さんにお願いしたいのは他でもありません、孫の葵の事なんです」
「半年ほど前から変な夢をご覧になってるとか」

「ちょうど不登校が始まった時期です。関係あるかわかりませんが」
小山内さんの孫娘の葵ちゃんは中学二年。互いに不倫して家庭を持った親とは疎遠で、殆ど交流を絶っているそうだ。
「学校に行かなくなった理由はわかんないんですか」
「本人が頑なに話そうとしないんです」
小山内さんがもどかしげに唇を噛む。茶倉が涼しげに茶を啜り、爺ちゃんが眉間に皺を刻んで腕を組む。
「クラスでいじめとかは」
「担任の先生は把握してらっしゃいませんでした。幼稚園から一緒のお友達にも電話で訊いてみたんですが」
「名前は？」
「青木さんです。葵のクラスメイトで今も時々様子を見に来てくれるんですけど、本人が会いたがらず」
心の隅にメモっとく。
茶倉が静かに湯呑を置く。
「夢遊病の発症は悪夢を見始めたのと同じ半年前。黒い蝶に心当たりは？」
「全く。ご覧のとおり屋敷に蝶の襖絵はございませんし……心療内科の先生は心因性の症状じゃないかっておっしゃってるんですが、それにしては腑に落ちず。ほうぼうのツテを頼り睡眠専門医にも相談してみたものの一向に改善されずお手上げです」
頬はげっそりこけ心労の色が濃い。孫の奇行に悩み、その身を心から案じてるのが伝わってきて同情を誘った。

茶倉が思慮深く唇をなぞる。
「夢遊病は別名睡眠時遊行症ともいい、パラソムニア……いわゆる睡眠障害の一種に分類されます。これは遺伝病ともいわれ、両親が幼児期に夢遊病だったら、お子さんも発症率が高いそうです」
「息子にそんな兆候ありませんでしたよ、小さい頃に数回おねしょした位で」
「普段と異なる環境におかれ、心身の緊張時に起きやすいとも言われてますね。ノンレム睡眠の時に起きるので本人が覚えてないのも不思議じゃありません。半年前から症状が出ていたなら、慢性的な寝不足を訴えてませんでしたか」
「ええ、よくあくびしていました。てっきり夜更かしが原因とばかり……遅くても夜九時には布団に入ってしまうんで、あの子の異常に気付けなかったんです」
「無理ないっすよこの広さじゃ、葵ちゃんが出歩いたってすれ違うことまずないでしょ」
慌ててフォローするも小山内さんは落ち込んでいた。
葵ちゃんが繰り返し見る夢は決まってる。真夜中に屋敷の北側を歩いてると黒い蝶が現れ、蝶の襖絵が描かれた座敷に誘われる。それはどこにも存在しない幻の座敷だ。
隙間を覗こうと片目を当てれば、漆黒の蝶の大群が羽ばたいて纏わり付く。
蝶の群れに翻弄される少女を微笑んで見詰めているのは、座敷の真ん中に座った謎の女。
「女に心当たりは」
「知りません。葵も蝶に邪魔されハッキリとは見てないそうです、口元だけ辛うじて」
「小山内さんの家の人……ご先祖様とか？」
「わかりません」
申し訳なさげにうなだれる小山内さんに対し、ずけずけ詮索するのを躊躇する。
「ぢごくてふ」
全員霊能者に凝視を注ぐ。
「地獄蝶。葵さんが夢で目撃した蝶の名です。特徴から推測するに岐阜県関ヶ原近くに明治末期に見られたカラスアゲハでは

ないでしょうか。合戦場跡によく飛んでいた事から不吉のしるしと忌み嫌われたそうですが、対になる極楽蝶もいたとかいないとか。『極楽蝶早朝より出ずるは晴天』ということわざをご存じありませんか、書いて字の如く極楽蝶が早く飛ぶ日は晴れるって迷信です。蝶を眠りや死と紐付ける逸話は世界中に分布しており、黒い蝶は神社や火葬場でよく目撃される事から亡者の象徴とも言いますね。意味は神の使い、歓迎、トラブルの警告に転機の前兆……死体を食べる種の存在も無視できません」

「平家物語や源平盛衰記にもぎょうさん蝶文がでてきはったな。丸と揚羽は平清盛の家紋、平家の代表紋や」

軍記に詳しい爺ちゃんが参戦し、茶倉が無表情に付け足す。

「同業の家紋にも蝶が入ってます。仏教じゃ極楽浄土に魂を運ぶ神聖な生き物て見なされた他に、不死や不滅、輪廻転生の象徴て信じられてました」

小山内さんの顔から血の気が引いてく。

「その地獄蝶がどうして葵の夢に？　やっぱり悪いしらせなんでしょうか。た、祟りとか呪いとか……だけど葵は心が優しい子で、虫をいじめ殺すようなことは絶対しないって」

「落ち着きなさい雅さん」

狼狽著しい小山内さんを爺ちゃんが宥め、茶倉がさっさと腰を浮かす。

「葵さんの話を聞かせてください」

「縁側にいました。今呼んできます」

「直に行った方が早そうですね」

茶倉が俺に顎をしゃくり、ふたり揃って廊下へ出る。居間には小山内さんと爺ちゃんが残された。

「老いらくの恋の行方が気になるか」

「ゲスい想像すな」

小山内さんの慰め役は爺ちゃんに任せ、襖を閉めて縁側に行く。途中注意して観察すりゃ、至る所に影ができているのがわかった。

「おったで」

庭に面した縁側の柱に凭れ、スマホをいじっている女の子が目にとまる。年の頃は十三・四、思いきりよいショートヘアがボーイッシュな印象を引き立てる可愛い子だ。ただしジャージ。
「葵ちゃん？」
女の子がハッとして顔を上げる。できるだけ陽気に歩み寄る。
「驚かせてごめん。俺は烏丸理一、君のお婆さんに呼ばれたんだ」
「おばあちゃんに？」
「そ、孫の悪夢を解決してくれって依頼。怪しいもんじゃねーから安心してくれ、心霊トラブルの専門家なんだ。ＴＳＳって言って……知らねえか。ほらお前も」
「茶倉練。よろしゅうに」
茶倉を肘で小突き名刺を出させる。
名刺を受け取った葵ちゃんは警戒心まるだしで俺たちをじろじろ見比べたのち、茶倉の顔に視線を固定して疑り深く呟く。
「タピオカの人？」
茶倉が凍り付く。
続けてスマホを操作、新幹線で視聴済みの動画を再生。
「やっぱタピオカの人だ」
「ちゃうわアホんだら」
「じゃあホスト芸人？」
「ぶはっ！」
すげーやこの子、しょっぱな地雷原でタップダンスか。茶倉が猫をかなぐり捨てたのは本気でキレてる証拠、もはや敬語は使わず地金剥き出しの関西弁で罵る。
「動画見とんのに何で職業知らんねん、わざとボケ倒しとんのか？」
「よく知んない。回ってきた動画見ただけだもん」

「ひーっひっ！」
「引き笑いきしょ。はよ止めな殺すで」
「名刺の肩書にホスト芸人追加しとけよ」
柱を叩いて爆笑する俺の脛を茶倉が狙い定めて蹴ってくる。葵ちゃんがスマホを伏せて訊く。
「お祓いにきたの？　無駄だよ、色んな人に見てもらったけどさっぱり進展ないし」
「俺たちが初めてじゃねーのか」
そりゃそうだ、爺ちゃんに助け船出す前に地元の神主なり住職なりを頼ってるはず。葵ちゃんが体育座りし、俺と茶倉を睨む。
「悪いこと言わない。早く帰った方がいい」
「夢遊病治したないんか」
「だから無駄だって」
「なんで決め付けんの？　せっかく来たんだしさ、話だけでも聞かせてくんないかな」
「……」
しゃがんで視線の高さを調節する。
「力になりたいんだ」
爺ちゃんの友達の頼みってのをおいといても、目の下にクマを作り、ひとりぼっちで膝を抱えた子をほっとけねえ。
「八ツ橋食べる？　ラムネ味がおすすめ」
大急ぎで居間に戻り、残り少ない八ツ橋の箱を取ってくる。葵ちゃんは真顔。
「ごめんなさい、知らない人にお菓子もらっちゃいけないっておばあちゃんに言われたから」
「自己紹介したじゃん！」
落胆し蓋を閉める。
「そない邪魔にせんかて用が済んだらすぐ帰る。小山内さんが言うとった事はホンマか？　半年前からけったいな夢見始めたんやな」

「……うん」
遂に降参し、やけっぱちで頷く。
「どんな夢や」
「おばあちゃんに聞いたでしょ、黒い蝶が出てくる夢だよ。真夜中に屋敷の北廊下歩いてて、蝶の襖絵が描かれた知らない座敷に行き当たるの」
「ずっと同じか。変化はないんか」
「もっと優しく聞け」
束の間押し黙り、暗い目を伏せて答える。
「……襖がだんだん開いてくんだ。最初はぴったり閉じてたのに」

迎え入れるように。
招き入れるように。【以下続】